郷土史資料集（2）

郷土能野焼

西之表市立図書館

序

郷土史資料集の第二輯として「能野焼」を刊行する。

能野焼の由来、特徴及び種類、さらに丹念な図写、多くの写真を添附して能野焼の大体を系統だてた点に、資料としての意義があり、同時に郷土に住む者の能野焼に対する深い愛情を感得することが出来ると思う。

著者浦添助直氏(鴻峰小学校長)が苦心の原稿を快よく貸与され刊行を御承諾下さった事に対して深く感謝の意を表するものである。

西之表市立図書館長

古市　清香

もくじ

一　能野焼の由来……二
二　能野焼の種類……七
三　能野焼の特徴……一四
四　能野焼の保存……一六
五　中種子焼……一七
六　能野焼復興策……一七
七　結び……一八

郷土能野焼

一　能野焼の由来

能野焼がいつの時代に、どのようにして始められたのか。正確を示す史料は発見されていない。ただ島唯一つの古典ともいうべき「種子島家譜」にありありと史実の一端を見出すことが出来る。曰く「宝暦三年（一七五三）能野の次兵衛陶治の功を賞じて能野氏をあたえ足軽となす。享和元年（一八〇一）能野七郎次自製の陶器を納むるをもってこれを郷士となす。文化十年能野の権蔵を以て一世足軽となし小浜氏を与う。陶器の功を以てなり。」と。

鹿児島大学教授陶芸研究家新野稔先生は宝永―正徳（一七〇四―一七一五）が開窯の時期ではないかと指摘して、次のように述べている。「能野焼は苗代川五本松の系統ではないかと思われる。当時は笠野原移住（一七〇四）が終わり、竜門司第三築窯、一七三〇琉球陶工来、苗代川、翌年苗代川窯保護を島津藩が中止するという多難な年で、ちょうど五本松窯も使用不能になった年代であるから、能野が五本松系統と目される背景はそろっている。」と。

日本工芸館長三宅忠一先生は、実地踏査の結果、つぎのように述べている。「江戸初期（一六〇〇）あるいは慶長年間に直接朝鮮人陶工によってもたらされた窯であったものと推定する。朝鮮征伐のおり種子島氏が出陣されたことは史実によって明白であり、その当時他の大名に見られる如く、直接朝鮮から陶工を従えてきたのではないか。現有する能野焼雲助三点の口づくりが、朝鮮のごく古い技法と全く同じものが見られる。又六つの窯跡は朝鮮系の登り窯である。」と。

能野焼窯跡の祠に「弘化四年（一八四五）本性坊」とあり改築窯のおり、当時の陶工が銘記したのではないかと推測される。

現有する能野焼に、享保元年（一七一六）延享十二年（一七二五）と銘記されたものがある。これによれば、新野先生

の説、宝永―正徳（一七〇四―一七一五）に開窯しているとしても、たいした時代のずれは感ぜられないようである。三宅先生の説、「江戸初期の開窯で、土器が進歩したものと、南蛮焼きしめ系、朝鮮系の三つの要素が、現有する焼物から推察することが出来る。」という説を取りあげると、その由来は混沌として興味つきないものがある。

専門家の説、さらに史実、作品からおして一七〇〇年頃は開窯されていたと断定することが出来る。この土地の長老の語りでは、「伊集院苗代川より陶工が渡島し、この業をはじめた」という。現在一代陶工の墓として、地元窯主の墓地に残っており、風化した墓石からはなんの資料も得られないが苗代川と密接な関係にあることは事実のようである。後述。

能野焼がその起源はいずれにもせよ、苗代川焼と深いつながりがあるとすれば、苗代川の起りについて述べる必要があろう。

話は遠く遡って加藤清正の朝鮮征伐から始めなければならない。一回を文禄の役（一五九二）二回を慶長の役（一五九八）という。この二回の戦いを「征韓の役」と呼び、別名焼物戦争と呼ばれている。この戦が終了までに要した年月は実に二〇年といわれ、要した兵力一五万八千余、国内にとっても大きな衝激があった。当時夫やわが子を戦いに失い、その悲しさを綴ったと伝えられる、川内久見崎に残る「想夫恋」に、「殿をめなら涙はいでぬ、みたま参りに盆踊り」哀々切切たる抒情詩の中に、当時の未亡人のあわれな情景を想像することが出来る。多大な衝激もさることながら、反面大陸の文化がわが国にもたらされたことも大きな収穫であった。中でも、「焼物戦争」という名にふさわしく焼物に関する種々な文化が導入された。史実の中に「当時従えてきた朝鮮人は百余名」としるされているが、その大部分は陶工であったという。

「征韓の役」に郷士種子島家十六代久時も四回にわたり出陣している。（種子島家譜）この史実から三宅先生の直接朝鮮から陶工をつれてきたという説も考えられる。

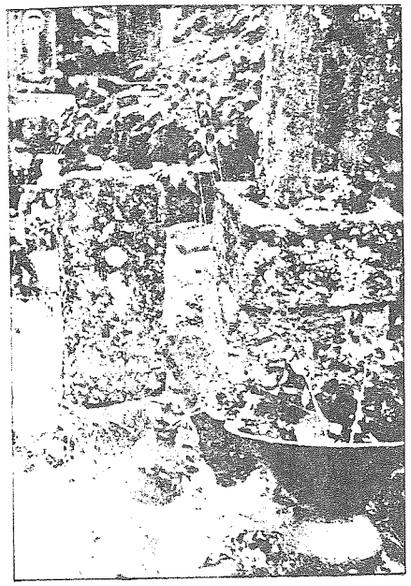
十七代島津義弘は陣頭指揮をとり、赫々たる武勲を立ててかえってきたが、多くの陶工を従えて薩摩にかえり、窯業に従事せしめた。これが薩摩焼の発端となり、凡そ三百五十年前よりはじめられたことになる。

串木野に上陸した朝鮮人陶工は、伊集院苗代川に居住させ外部との交流をとじ、島津の保護のもとに、一般用の器具を作らせた。しかも、絵入りや、模様入りは禁止し、釉薬の加減による変化のみとした素朴な器物が三百年間、外部とたち切った中に独得な焼物が作られたことになる。飾りけのない

男性的な、どっしりした朝鮮風の作りかたが、こゝ苗代川の特徴といえよう。

嘉永元年（一八四八）藩通達に、「遠キ以前ヨリ肥前焼物ソノホカ他国製ノ焼物ヲ輸入スルコトヲ禁ジオキタルニ、近来マタマタ内密ニ輸入スルアルヲ以テ厳禁ス」薩摩の人達は、いわば黒ジョカ以外は使用出来なかったことになる。生活に必要なものはなんでもつくられた。

伊集院より陶工がいつ島に渡ってきたかは明らかでないが、一代陶工の墓が当地にあるところから、渡来は事実であるが、（弘化四年）本性坊なる人か今尚不明にふされている。一七〇

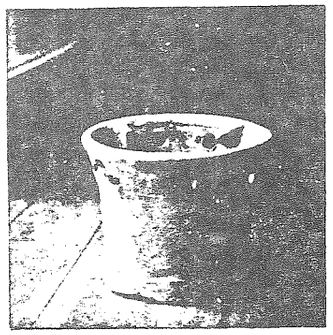


伊集院より渡来したといわれる一代陶工夫婦の墓

風化されてただ原形をとどめるのみである。

〇年頃開窯し、陶工の渡来によりはじめられたとすれば、本性坊は一代陶工ではありえない。一四〇年の時代のずれがある。

地元長老遠藤孝助翁九四才はこう語る。「その昔一代の陶工が苗代川より渡島し、今の住吉能野部落に窯を築き、地元の人々を使して焼物をはじめた。焼物は日用雑器にわたり、つぼ、花びん、食器、仏具等におよんだ。「つぼや牧」といって、ひろい山林が従業員たちにあたえられた。従業員はかたわら農事を営みながら斯業に専念した。税は焼物を納め民間にあっては物々交換が行われ、一つの器物に穀物を入れ、それに満ちた量が交換条件であった。従って一升のつぼは一升の籾米が交換の対象となったのである。当地域は勿論、同市安納に「つぼや宿」というものがあり、焼物を商売するための専用宿であった。全島に焼物は流布し、更に屋久島、遠く沖縄まで木帆船で焼物を運び交流されたようである。能野焼窯元といわれる能野家より琉球通宝が発見されたが、貿易の交流によってもたらされたものか、琉球陶工が持参したものか明らかでないが、



能野焼　七　輪

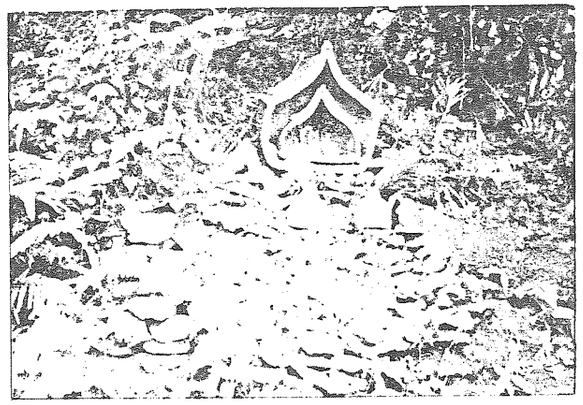
発見されたことは事実である。

一代陶工は日用雑器製作に専念し、一生をこの地で送け、その夫婦の墓が今尚保存されている。風化された墓石は、年令、年号、氏名は皆目わからず、史料を正すことは出来ない。二代陶工が再び伊集院より渡来し、一代陶工の志をついで、日用雑器を作っていたが、こまめな生業に不満をもち、たまたま種子島縦貫道路の開通工事が行われたので、道路排水用土管製造に方向を転じようとして、従来の焼窯を取りこわし、大型のものを改築し、土管製造にとりかゝった。多額な経費を投じて再築した窯であったが、土管の製法芳しくなく、海外移出計画も水泡と化し、その大望はくずれさった。この衝激によって二代陶工は霞の如く本土へ逃げかえったという。後に残った地元従業員は、再興をはかったが、乏しい生活の中にあっては詮方なく、年に一人去り二人去りして、その姿を消してしまった。往時風びした島の一大産業もこゝにおいて終止符をうってしまった。時恰も明治三十五年頃（一九〇二）といわれる。」

古老はさらにことばを続けて、「自分達が青年時代に、焼物用薪木伐採に度々おもむいたことがある。当時の焼窯の情景は、まだはっきりと記憶に残っている。粘土を運ぶ人、杖をついて粘土を足踏みする人、藁屋根の下で、ロクロを蹴る人と分業的に持場が定められており、無器用な者は、成形の方には番が当らなかった。そして何日かたって作品が出来上ると窯に入れ、夜を徹して火を入れた。記憶では三日—四日焼き続けたのではなかろうか。焚口には夜など、三、四名の若者が酒を口に含みながら笑い興じていたことを思い出す。」と。

焼物を献じて、能野の姓をいただいたという窯元の八五才になるおばあさんは、「自分がこの家に嫁入りした当時、伊集院の人だという陶工が同宿していた。名前は忘れてしまったが、焼物の大将だといっていた。」又一代陶工が持参した花ざしだという白さつま焼を見せてくれた。当家の先祖は一流

の技術者であったといわれるが、こゝにどっしりとした偉風なソテツを模した花びんが床の間におかれてある。当時能野焼に従事した地元の人々は、能野姓を名のる者四、遠藤一、日高二、上妻一となっているが、その他にもいたようである。現在能野部落民生委員の能野袈裟八氏七二才は「自分は能野家に養子入りしたのであるが、能野焼がとだえた後、父は自分の家に小型の窯を築いて網につける岩石を焼いていた。父は口癖のように焼物をはじめたいといっていたが、同志がなくロクロ用材を集めたまゝ世を去ってしまったが、出来れば復活したいものだ。」と。



窯後に祀られている祠

往時営まれていた場所に、ツボヤ神社と名づけられる跡がある。焼物で作られた高さ五十糎程の小さな祠であるが、この祠の中に「弘化四年本性坊」という記事が見られる。鹿大教授新野先生の説で「本性坊が能野焼の修業者である」とすれば、一体どのように解釈すればよいか。本性坊を一代陶工とすれば、弘化年間に渡島となり、現有する能野焼に享保元年（一七一六）の銘が入っていること、又家譜に宝暦三年（一七五三）陶治の功を賞じて能野氏を与えられた記事に比較して、一代陶工の来島は、能野焼開窯から百三十年のずれが考えられる。従って以前に島独得の焼物が営まれていたという説がなりたつ。又二代陶工であるとすれば、二代目は失敗して逃げかえった時代は明治三十年頃になるので、弘化四年とはおよそ六十年のずれがあるので、これも考えられない。しからば本性坊なる人は一代陶工でありその以前から焼物が行われていて、新しい技法を伊集院よりもちきたり能野焼に一段のさえをあたえた人であるのか、あるいはたんなるお坊さんで火の神を祀った人なのか、このへんに研究の余地があるようである。

史実によっても明らかな如く個人窯でなく、数人による共同経営であった。陶器の功により能野氏、小浜氏などをあたえられた記事が残っている。

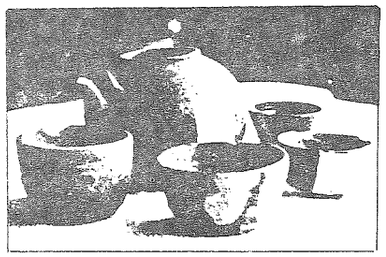
当時焼物に従事していた人々の子孫は、今尚年の初めに集い、ツボヤ祭を行っている。荒廃した共有地には祠がまつら

れ、わずかに往時のなごりをとゞめるのみである。

二　能野焼の種類

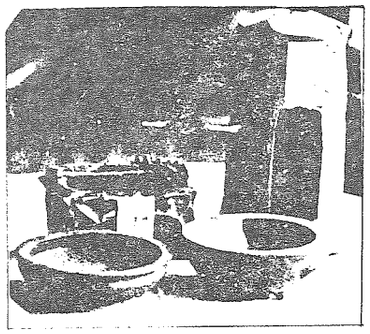
苗代川の特徴として、生活に必要な日用器具はほとんど作られたことをあげたが、能野焼においてもそのことが言えるようである。穀物を入れる様々な形、大きさの違いなどが印象的である。この種のものは今尚大部分の家で使用されている。第二は花立て、花びんが圧倒的に多く、この形や大きさも様々である。こゝで苗代川と違う点は、無地なものも多いが、色々な模様や絵入りが多いということである。さらに島独得の素材がつかわれソテツを模した花びんが色々工夫されている。横線のひき方にしても直線があり、曲線があり、さらに松竹梅等をモチーフとしたもの、往時陶工の創造力に感激させられる。焼物秘法とされている「二重すかし彫り」の花びんも見られるが、苗代川の不自由な条件の中に営まれたのに比して、自由に様々なものが作られたことが一つの特徴であろう。「ツボヤ牧」という山林があたえられたこと、陶工の功を賞して氏をあたえ、足軽や郷士に取りたてゝいる所から保護のもとに優遇されながら営まれていたもようである。島の生活に必要なものは、悉く作られ生活の要に供していたものと思う。

次にかゝげる写真は現有物の一端であるが範囲のひろさがうかがえられよう。



（1）　食器類

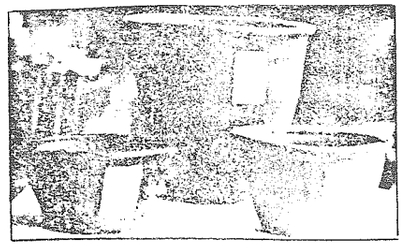
この種の器物は数少ない。これは日用器具の内でもっとも使用されるものである。他の器物以上相当数が作られたものと考えられる。現有物があまり見られないことは使用量が激しい上に破損しやすいためだろう。



（2）　仏具・焼香

各家庭に多く見られ，今尚使用されている。

形もいろいろと工夫がなされ大きさも大小様々である。



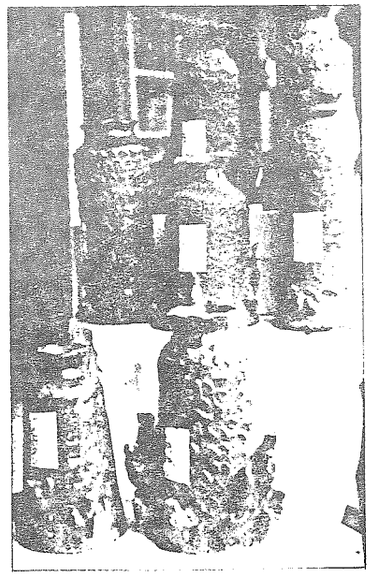
（3）　片口・セイロー

片口の利用度は大きい。酒，醤油，酢等のはかりや容器に入れる時なくてはならないものである。

セイローは蒸し物に利用されたと考えられるが島独得の蒸し菓子があるがそれらに使用されたものだろう。

（4）　壺・徳利

小さな壺，大小の徳利の一部である。この種は数多く見られる。いろいろと工夫され横に凸状の口があったり，穴を作ったりしたものがある。



（5）　花びん（ソテツ）

能野焼の作品を代表するものといえる島のソテツに着意した陶工の創造力に驚く。この種のものは全国になく島独得のもので形にもいろいろ変化が見られる。

（6）　花びん（孟宗竹）

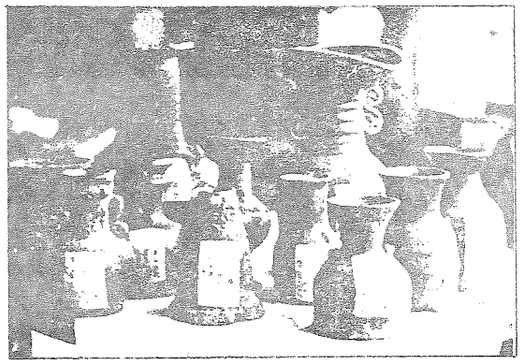
大小様々なこの種のものは形に意匠のあとが偲ばれる。更にこれらに梅，唐草などの模様を刻んだものもある。数は多い。

（7）　二重スカシ花びん

この種は現有物は3点のみ。うち1点は市文化財に指定されている。高度の技術を要するもので現在でも秘法とされてあるもの。

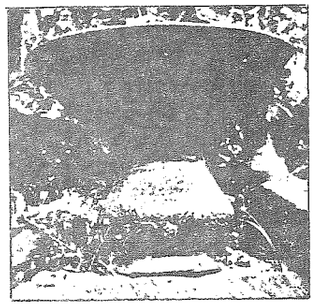
（8）　墓石（其の1）

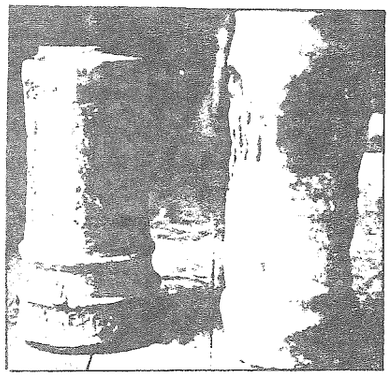
堂々とした二段構えのもの，元能野焼窯元の先祖に多く見られる。中には年号を付したものがある。



（9）　花たて

自由に形を工夫した種々な花立て。どっしりとした男性的な美が感ぜられる。

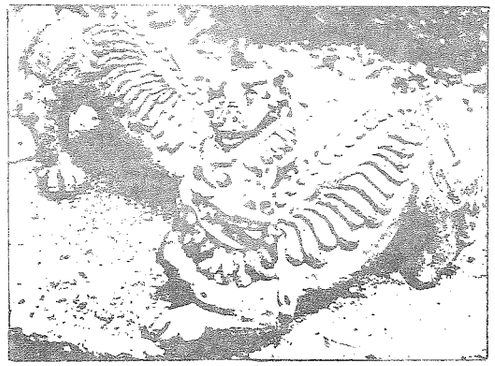




（10）　花びん

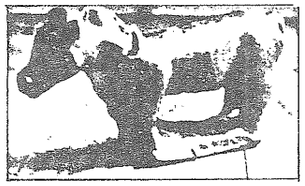
耳のひろい典形的な花びんであるが，陶器としては高度の秘法だといわれる。

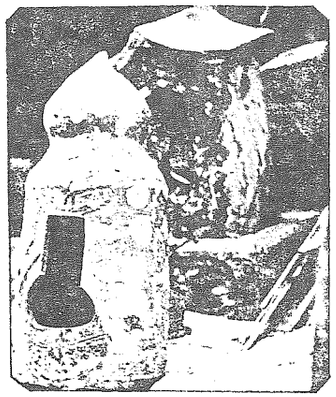
故有山長太郎氏も驚嘆したといわれる。



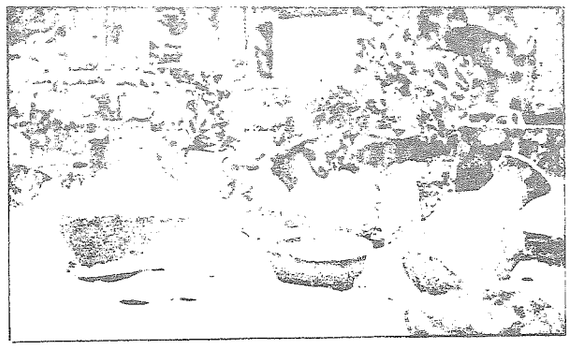
（11）　動物像

唐獅子，馬，虎等のものが神社やお寺などに残っている所から，供養物に奉納されたものと考える。この他，人物，猪などがある。





（１２）　墓石（其の２）
一段構えと丸物である。
これらも旧い家柄の墓に多く見られる。



（１３）
能野部落墓場に放置されている花立てである。無傷のものは少ないが今尚数多くの焼物が散乱している。

（１４）　日用雑器

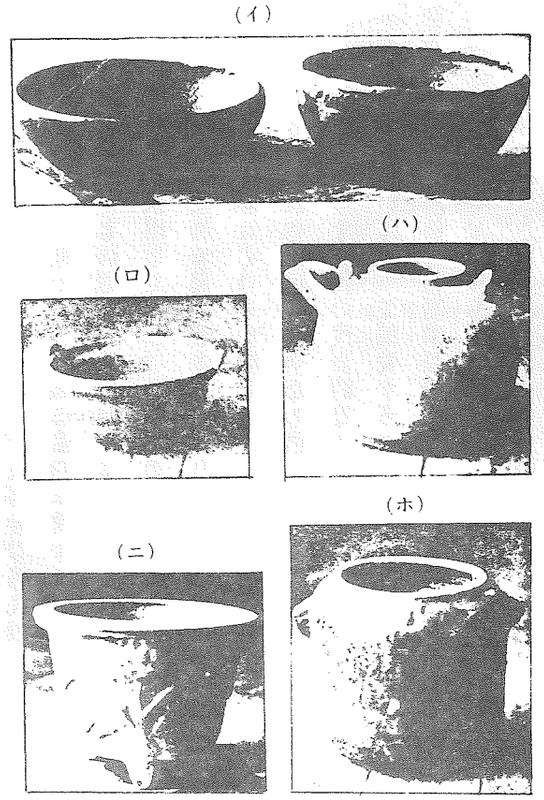
（イ）　皿

（ロ）　鍋

（ハ）　キュース

（ニ）　花鉢

（ホ）　セイロー



図(1)は食器・茶器であるが、現存するものは数少ない。日常生活には欠くことの出来ない器具だけに数が見られないというのは、使用度が激しく破損し易いので現物は見られない。(2)は仏具で祠と焼香用器であるが現在数多く見られる。(3)は片口であり醤油、酢、焼酎等のはかり入れに使用された。片口は古い家には今もよく見られる。中央の器物はセイロー蒸し器として使用された。(4)は様々な壷類であるが形も一つ一つ違い大小様々である。これも各家庭に多く現在も使用されている。この種には横線が入っているが、波状線は南方系の手法だと、ある専門家は指摘された。直線系は朝鮮系であり、苗代川系統のものといわれ、外に年号入り、氏名入りがあるのもこの種のものに限っている。(5)はソテツを素材とした花びんである。形の工夫が丹念になされ一つ一つにそのよさが感ぜられる。重々しくどっしりした男性的な素朴さがすなおに表現されている。(6)は5と同様地域から取材した竹である。これにもいろいろと形に工夫が見られる。孟宗竹に似せて節を入れてあるもの、入れていないもの、筍がた、更に梅、松の絵入りなどがある。(7)は二重スカシ彫りの花びんであるが、おそらく武家使用のものではなかったろうか、現今陶業界において秘法とされている技法の一つであり、こうした作品が当地に見られるということは、往時能野焼の技術の高さを示す一つの証左ともいえる。この作品は数少なく、現有物は数点にすぎない。(8)は焼物で出来た墓石、二段構えの立派なものであるが、能野姓の先祖墓に見られる。こ

れにも様々な形が残っている。(9)は花立て、大小様々な形、全く同一のものは珍しい。この種がもっとも多く、能野焼の現有する大部分はこれである。首のかざりにしても、ゼンマイ、クサリ、環等いろいろな手法が見られる。(10)は一代陶工夫婦の墓前に置かれている花びんで、上部をひろくひろげる技術は、なかなか困難があり、識るものは驚かされるという。(12)は動物を模したもので、地元氏神にはよく見かける作品である。神仏に奉納用として作ったもののようである。(13)は墓石であるがこの種にも大小数多く見られる。(14)は現在能野部落の墓場に放置されている能野焼花びんである。永い才月の間風雨にさらされて破損し完全なものとしては数少ない。

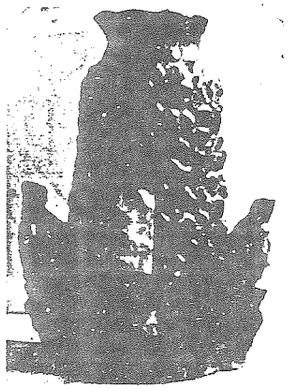
以上はいろいろな器物の代表的なもので、同一の種類で多少の差のあるものはすべて割愛することにした。長年月にわたって作られた関係上相当巾ひろく作られ、その量においても想像以上のものがあったものと思う。ひろく深く生活のすみずみまで使われた器物、それは能野焼であり、生活を形づくっていたもの、島の生活には偉大な重物であったわけである。

三　能野焼の特徴

第一の特徴は生活に必要な器物は悉く作られたこと。前述でもわかる通り衣食住に必要なものは勿論、仏具にいたるまで（土棺、墓石）作られ使用されていることである。

第二は地域に立脚したものが意図されているということ。花びんのソテツ・竹梅松等がそれであり、又風の強い島の墓場に使用する花びんはどっしりとして微動だにしない等当時陶工の意匠力に驚く。

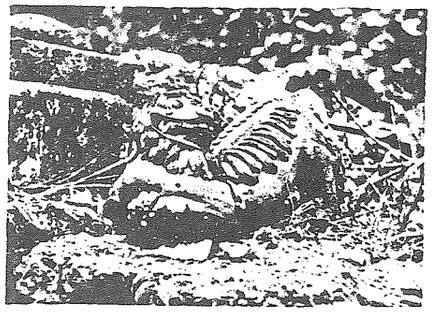
第三はいろいろな技法が見られること。前述したごとく共同経営であったので、個性美が強く、作品には、○㊀㊁㊂㊃の記号がふしてあり、ついていないものもあるが、共同窯であった証拠である。又それ故に思い思いに自由に作られた為め優れたものが出来上ったともいえよう。さらに作品の底の処理を見ると、手で丹念におさえて仕上げたもの、糸等で切り離



島の名産，ソテツに模して作られた花びんである。この種のものは多くいろいろな形のものがある。

したもの、指でつみきったもの、これらは思い思いの仕業であるのか、時代の差違によるものかなど今後の研究の一つであろう。

第四は能野焼に使用した釉薬がある。他の釉薬に比して、独得の光たくをもち一見してすぐ判別される。主成分は粘土であり、他の釉薬と同様木灰を混入し、その他に軽石、砂鉄等が豊富に散在するところから、これらを調合して作られたものと考えられる。島独得の釉薬の解明も今後にまつ研究課題であるが、開化した今日の陶業界においては、即座に釉薬の分析は可能であり、この研究は困難でない。



地元住吉神社に奉納されている唐獅子像
洗練された技術を偲ばせる作品である。

第五は能野焼に使用された粘土の分析である。昭和三十年鹿児島県窯業試験場に地元粘土十種類を依頼しその結果をえた。それが別表である。当時窯業主任寺尾先生はつぎのようにのべている。「種子島十種類の粘土の焼成試験を行なったが、何れも癖がなく、焼物用粘土として最適である。粘土中多量の鉄分が含有されているので、他の陶器に比し、重く堅

種子島粘土１０種焼成試験結果表

No順	可塑性（粘力）	弾力性（土の腰）	素焼迄の収縮率	本焼収縮率
1	上	佳	8分	1割4分
2	上	稍々劣	5分	1割
3	中	分子粗	2分	7分
4	上	分子粗　腰強	8分	1割3分
5	上	佳	8分	1割
6	上	佳	5分	8分
7	中	稍々劣	8分	1割3分
8	上	稍々劣	8分	1割3分
9	中	稍々劣	5分	1割
１０	上	稍々劣	7分	1割

註　この本焼試験はSK10番（摂氏１３００度）のゼーゲルが正確にとらえた結果である

鹿児島県窯業試験場

牢であること。又粘着力大で、腰弱く摂氏千度で焼成した作品は、他地方の千二百度で焼成したものと同等であり、二百度の燃料が節約されることになる。」と以上の説から見ても粘土が条件を備えている良質なものである。

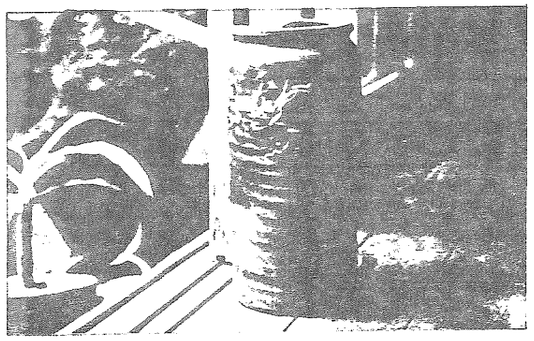
最後に出来上った作品が素朴でかざりけがなく、どっしりとした男性的な強さ、生活にせまられた自然美が感ぜられるということである。この点について三宅先生の論説をおかりしたいと思う。「日本古陶の中で、強烈さという点では種子島が最高だろう。全国的に著名な、備前、丹波、苗代川などの古陶器よりもっと力強い古窯が南海の種子島にうずもれていた事実は大きな驚きであった。この能野焼の出現で、日本の陶器に関する考えは根本から改められなければならない。」と。

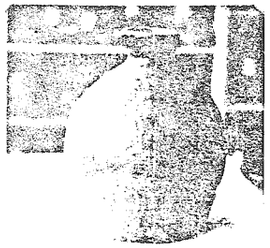
四　能野焼の保存

今からおよそ二百五十年前開窯され、爾来明治三十五年迄約二百年間、島唯一の産業として栄えていた事実は、全く偉大なことである。先人の偉業を公にし、往時の作品を収集して、郷土の文化財として保存することは地元の人達に課せられた大きな責任であるといえる。この意味において、昭和四十年二月「能野焼保存委員会」なるものを結成した。能野焼されたものは約二百点、一つ一つの作品には所有者名を付し台帳に記入、各係を設けて住吉中学校を本部として、保存棚に収められている。区役員、地元有識者、元能野焼窯元、PTA役員、中学校職員計二十二名の委員で構成されている。この会は

能野焼保存棚

の由来、そして作品の特徴、保存の意義等について、一片のプリントにものし、区全家庭に配布し、区役員、PTA役員、学校職員、元能野焼窯元、生徒会等々積極的な協力が実を結んで、学校に収集





中種子焼
壺

毎年一回行われ、作品の保管状況維持費の検討、能野焼復興等の問題を検討する。別紙写真は保管棚であるが、学校を訪れる人はまず能野焼に目をむける。そしてその立派さに驚くことだろう。又社会科学習上郷土の遺業を教え、郷土の将来における産業とのつながりにおいて、何か大きな暗示をあたえることだろう。郷土のために、みんなのために永く保存していきたいものである。

五　中種子焼

島内中種子町野間に焼物が行われていた。現在中馬友吉氏六十四才が窯主である。六十年前というから明治四十年頃になる。「父につれられて伊集院より渡島した。父は中種子町野間に以前から焼物を営んでいた石堂という人をたよって来たのだという。焼物は日用雑器で、壺、花鉢等で依頼により土管なども製造された。釉薬も近くにある粘土に木灰を混入して使用したが、上級品は本土より買入した。個人経営であったので成形に又薪集めに長期間を要した。いざ焼上っても合格品は六割程度で、経費を差しひくと赤字となり生計は立たず昭和二十年頃遂に窯を閉じてしまった。小企業で薪から買入して焼く人は赤字となり生業としては困難である。」と往時を偲びつゝ語ってくれた。家の近くの山には当時の窯が残っており連結窯の内側は釉薬が光って見える。

六　能野焼復興策について

昭和十四年頃初代有山長太郎氏は能野焼に着目し渡島した。そして粘土の調査、焼物等について検討の結果、長太郎焼第二工場を設置するよう計画し、窯用粘土を島外より運び、工場地を決定、その設置作業に取りかゝろうとする寸前急死された。かくて工場の設置はご破算となり、現在その地を長太郎と呼び人々に知られているが、焼物用としては、良質の粘土が無尽蔵にあり工場を誘致すれば可能なことである。ただ当面の問題点として次ぎの事項があげられる。

（中種子焼窯跡で）
手前能種子焼窯元　中馬友吉氏64才
（昭和20年頃まで焼物に従事）
中央は日本民芸協会長三宅忠一先生
後方は小生

第一は施設、誰が窯を作るかということ。元窯元と名のつく人はいるが、経験はなく多額な経費を

投入して始めるといった段階にきていない。地元の希望は「市営の形をとって市がある程度の窯を作ってやるべきだ。」とこれにもいろいろな問題があろう。

第二は陶工がいるか。粘土もあり、よし窯を作っても誰が焼くのかということである。これは昭和十四年能野焼が騒わがれた時代、地元から数名の子供が小学校を卒えてすぐ、長太郎焼に第子入りし、現在経験者が三名程度地元に在住しており、焼物がはじまれば自分達も協力したいという。然し水準の高まった現在、果して期待に添う陶工になるまで、相当の期間を要することだろう。

第三は生業として独立性があるか。この件については中種子焼が一つの教訓であろう。三宅先生はこの点について「往時一世を風靡した能野焼の再現ということは不可能であろう。不自由生活において、然も往時の非文化的知識の中に、精一杯力をうちこんで焼きあげた能野焼は、追いかける美でなく、追いかけられた美が内在している。用を考え条件を思索して作られた幼稚な作品には、素朴な美がある。時代がかわり、思想がかわり、常識が発達し、科学時代の人間は如何に努力しても往時の作品と同一の美を表現することは不可能なことである。」と語る。然らば復興は「意味なし」と断定してよいだろうか。先生はさらにことばをつづけて「いゝ粘土があるから焼いてみる、と気がるな所から小さな観光的なものから始めたらどうか。始めないと問題は解決されていかない。一朝一夕にことをなそうとすれば失敗にきすものだ」と。

第四は能野焼独得の釉薬の研究がある。他の焼物と混同しても一見でわかる釉薬の美その主成分の分解であるが、前述の通り今後の課題の一つであるが、容易に解決出来ると思う。発達した現在の陶業界においては問題にならない。中種子焼は粘土を主成分としたと語っているが、当地域の能野焼も、粘土が主成分で、それに木灰、砂鉄、軽石等の使用が考えられる。

七　結　び

以上まとまりのないまゝに能野焼について述べたのであるが、正確な資料としては物足りなさを感ずる。

開窯の時期についても正確におさえることはできなかった。この点については今後も課題として取りくんでいきたい。作品の種類は目で確かめた範囲の一部分である。このほか、いろいろな器物が作られたものと思う。

「能野焼研究」はその歴史の解明だけでなく、今後復興を如何にするか。といった問題までが研究の範囲でなければならない。昔をたどり、未来への橋がかけられた時、「能野焼研究」は終ったといえる。さればこゝに物した一篇は単なる序論にすぎないのである。

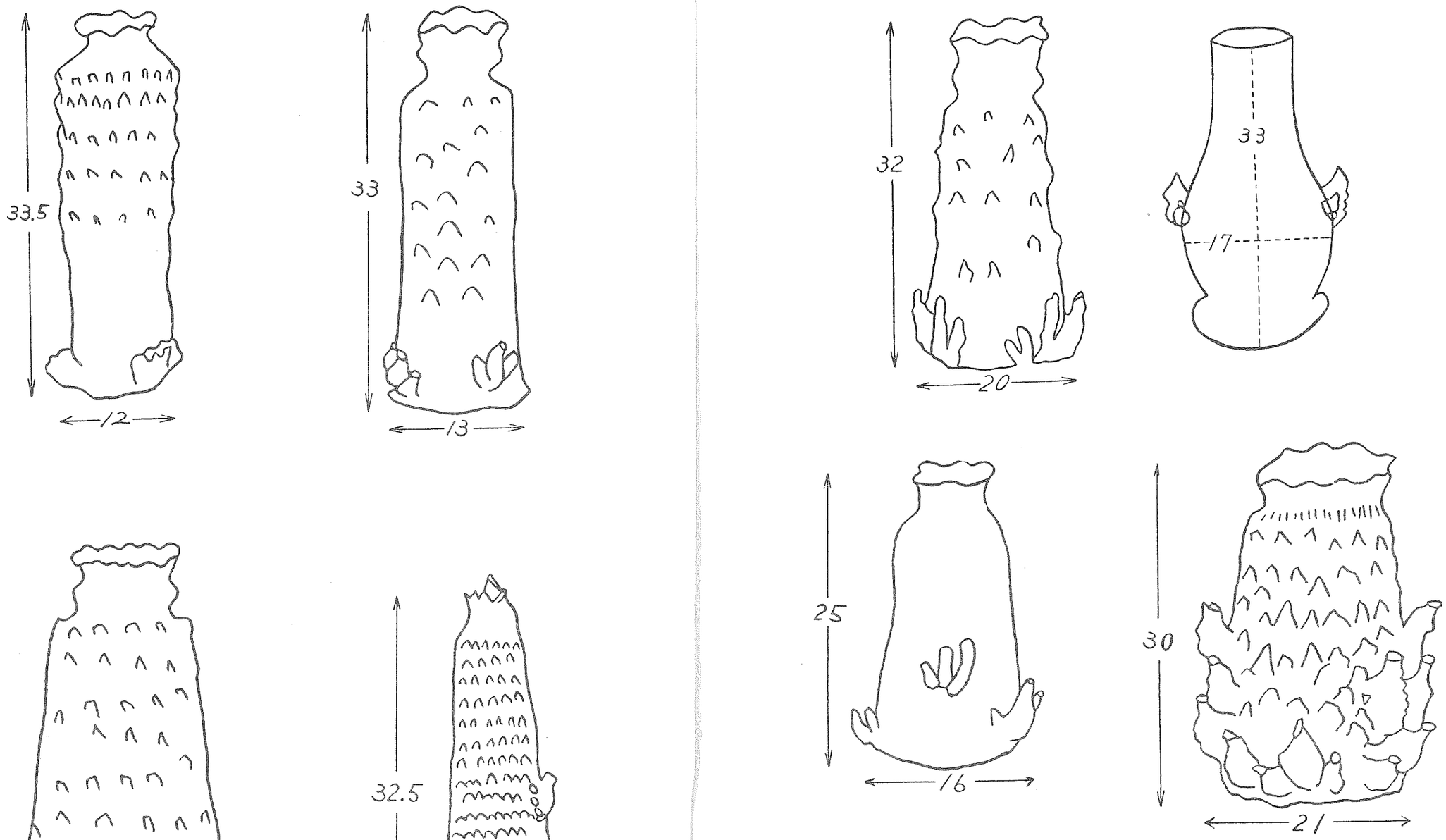
過去十年間、地元の一員として「能野焼研究」に興味を抱き、粘土をこね、窯を作り、焼物を調べいろいろと意をはらってきた。しかしその成果は遅々としてはかどらず現在にいたった。能野焼が公にしられ、各家庭の所有物が一ヶ所に保存されるようになったことは喜びにたえない。

復興は地域の問題として考えていくべきではなかろうか。「地域民芸として再興する意志があれば、日本民芸団は援助を惜しまない」と三宅先生は確約された。地元民はこのさい、更に認識を深め郷土の問題として真けんに取りくんでいく時期にいたっているといえる。

おわりにのぞみ、この研究物をつくる上に、貴重なる資料や、ご指導をいただいた方々の御芳名を記録して記念にしたいものである。

いろは順

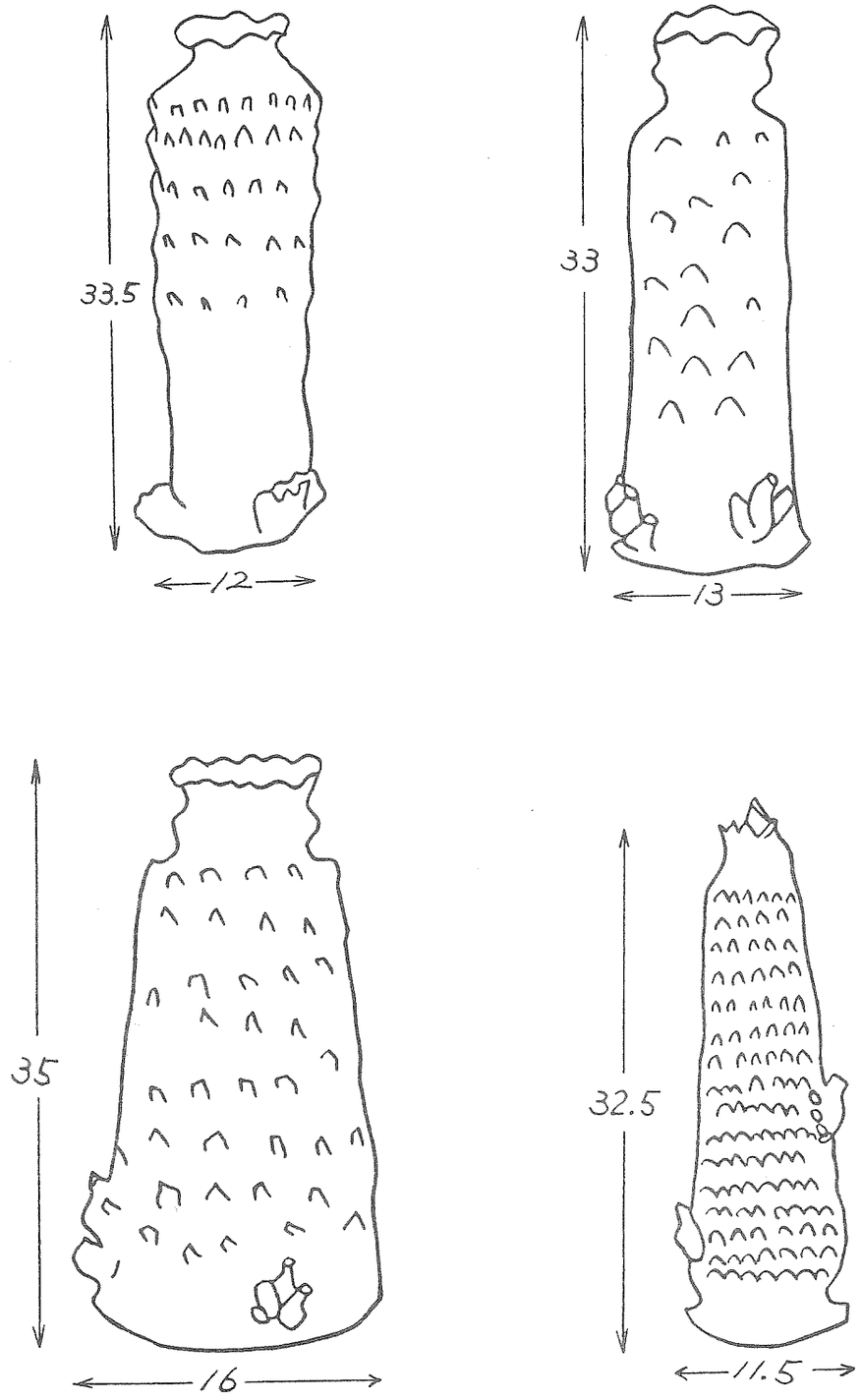
※鹿児島市　新野　穣（鹿大教授）
※中種子町野間　中馬　友吉（中種子焼窯元）
※西之表市住吉　能野　袈裟八（能野焼窯元）
※仝　右　能野　七郎（仝　右）
※鹿児島市易居　鶴田　幹了（古民芸）
※西之表市安納　名越　哲夫（古民芸元校長）
※西之表市住吉　遠藤　孝助（農業九四才）
※西之表市新城　平山　武章（西之表市役所）
※鹿児島市原良　寺尾　作次郎（県窯業試験場）
※鹿児島谷山　有山　長太郎（長太郎窯元）
※西之表田屋敷　鮫島　宗美（種実高校教諭）
※大阪市　三宅　忠一（日本工芸館長）
※西之表市　下野　敏見（種高校教諭）
※東京神楽坂　山本　秀雄（東京フジ電気）

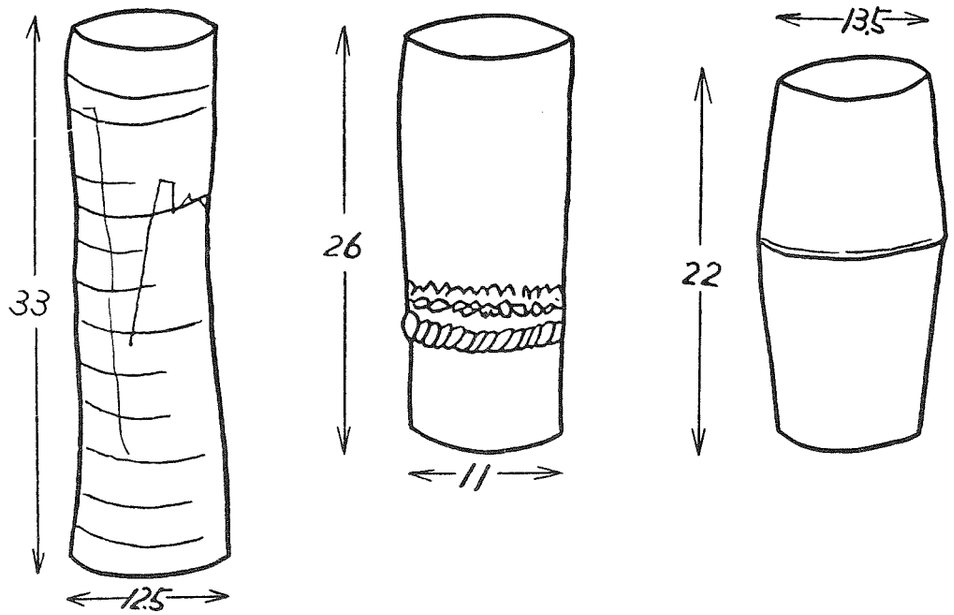


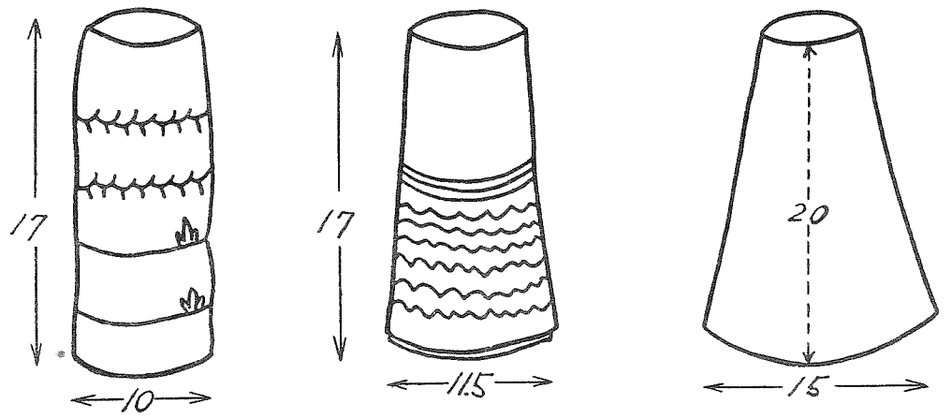
花びん（ソテツ）

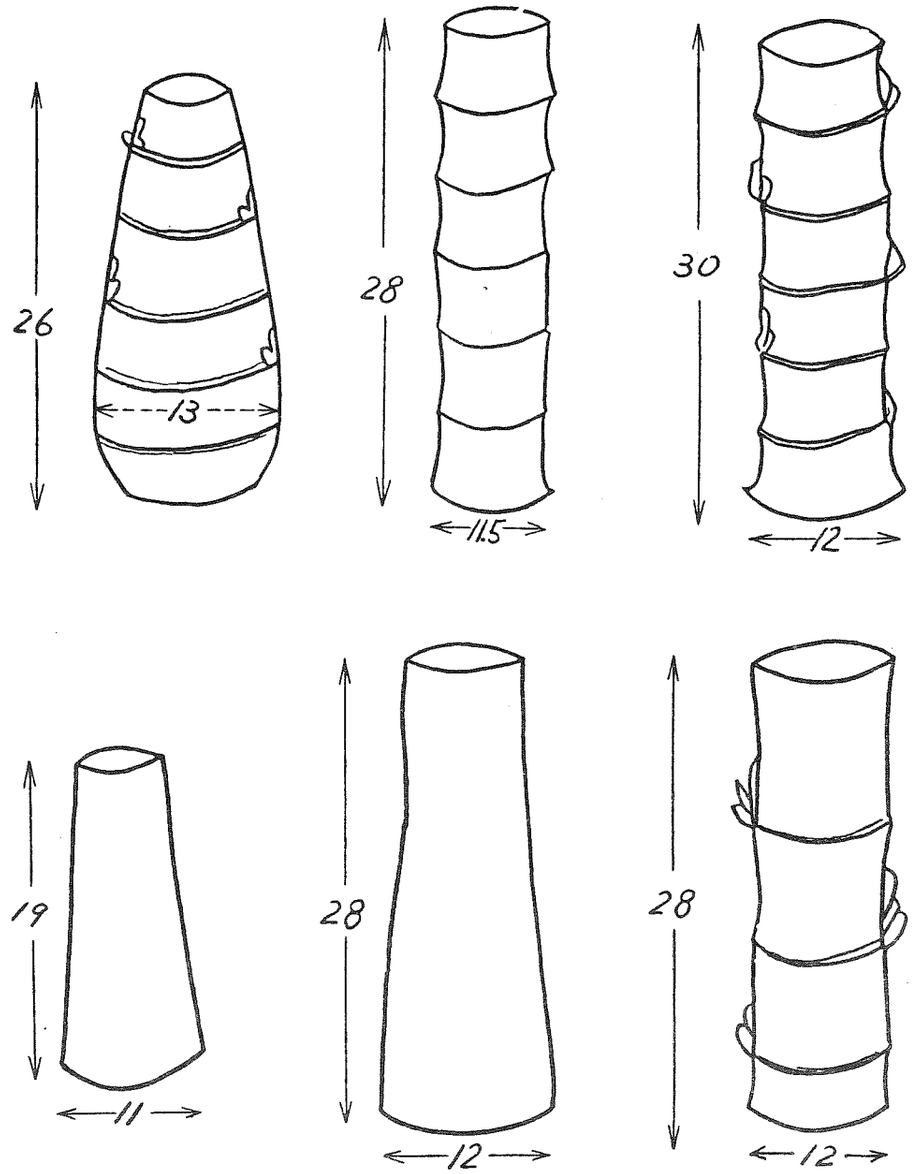
ソテツをモチーフした花びんの形を図解，大きさは大体同じものが多いが正確さがない。手びねり法であったろう。

数は多く見られ，形にいろいろと意匠をこらしたあとが，感得される。





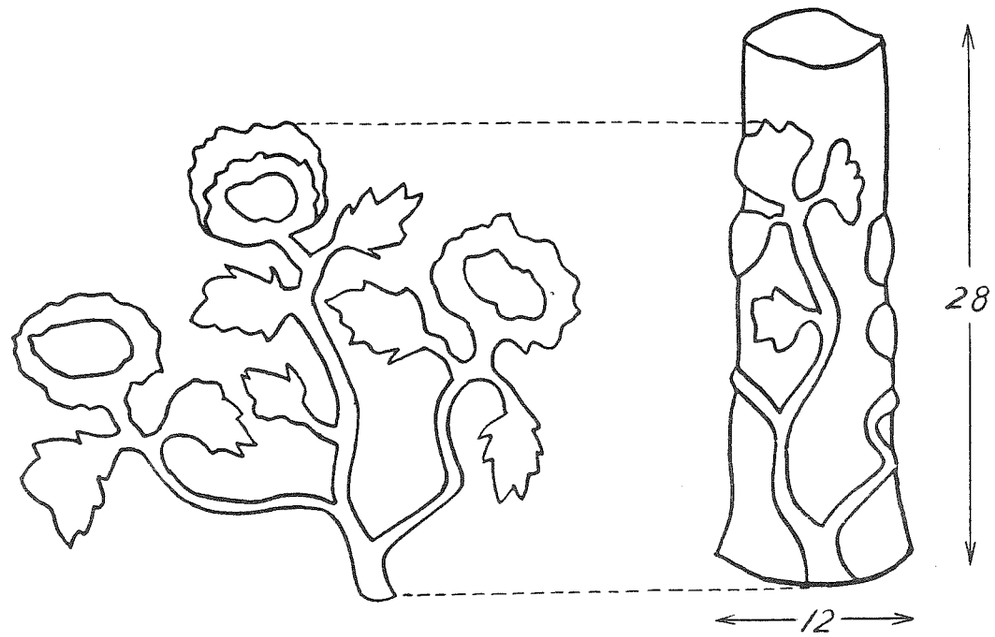


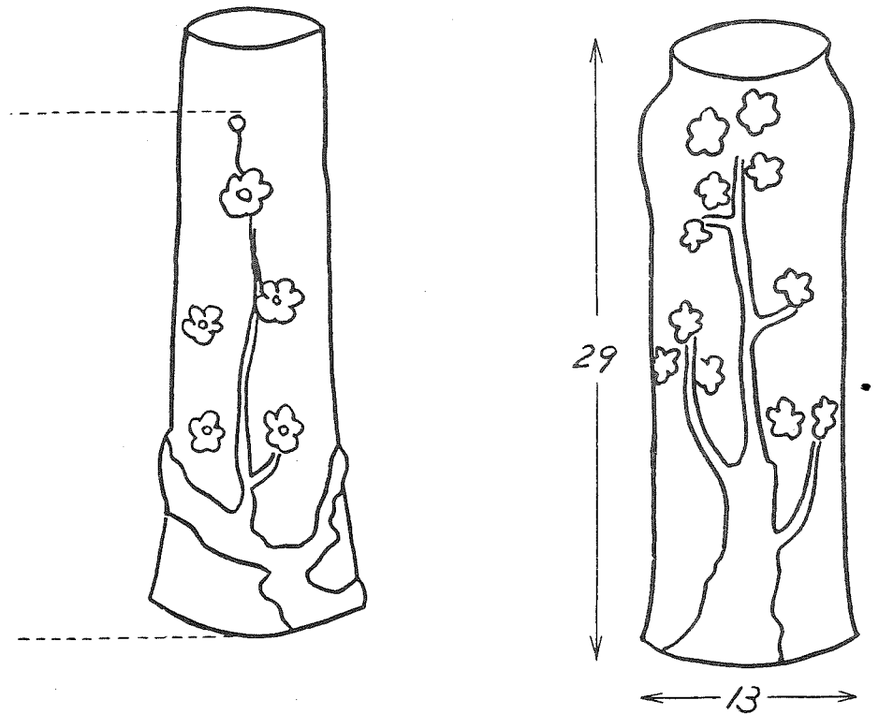


花びん（竹）

種子島原産モーソー竹をモチーフにした，種々な竹の形を表現した花びんである。つみ上げ式技法のようである。特に曲線模様のものがみられるが，これは南方形であるといわれる。

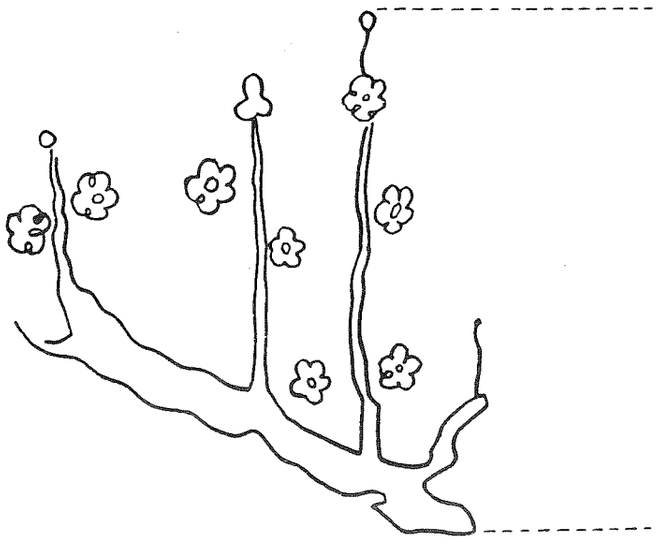
（鹿児島市在住 古民芸家鶴田先生の言）

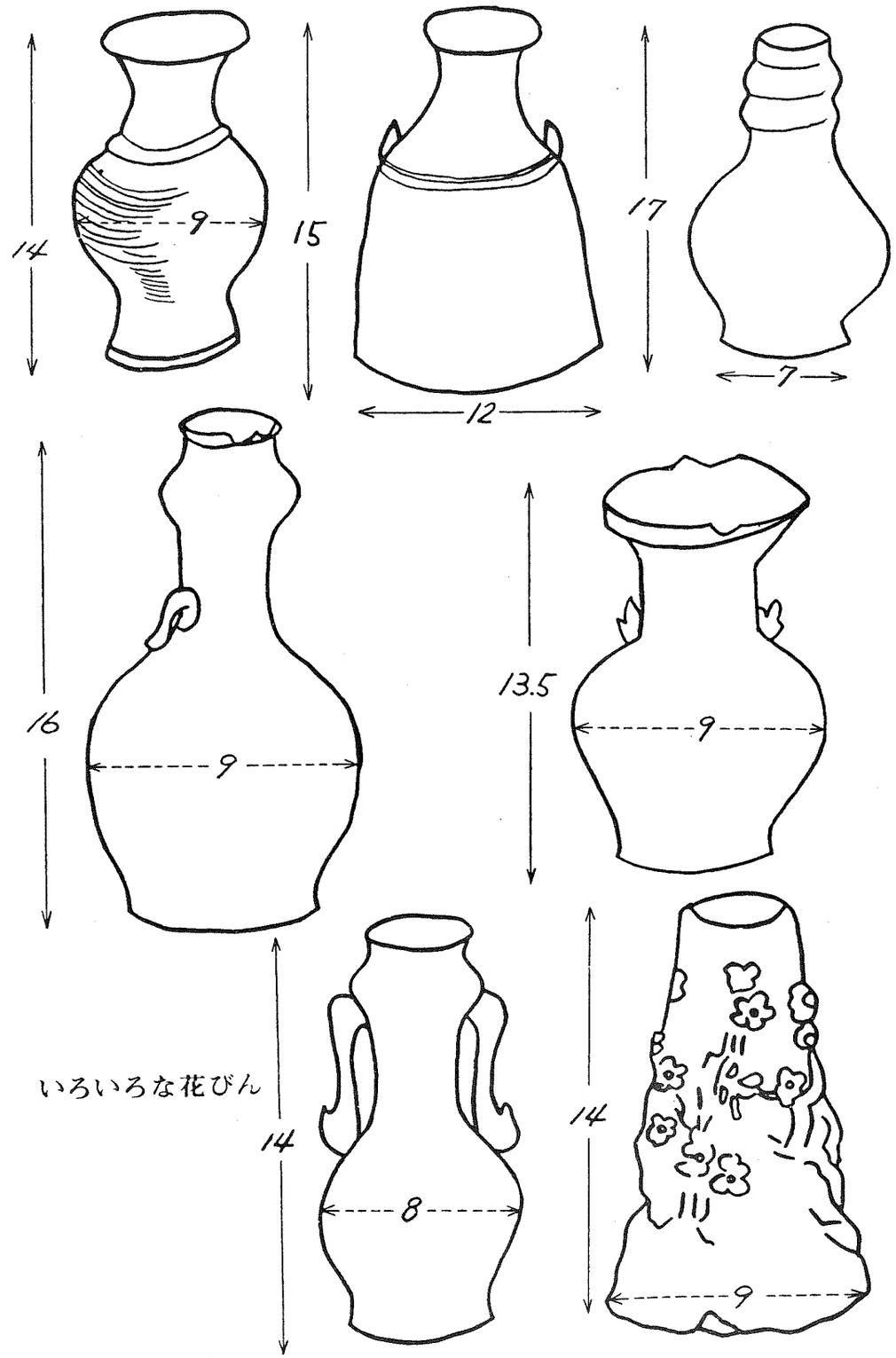




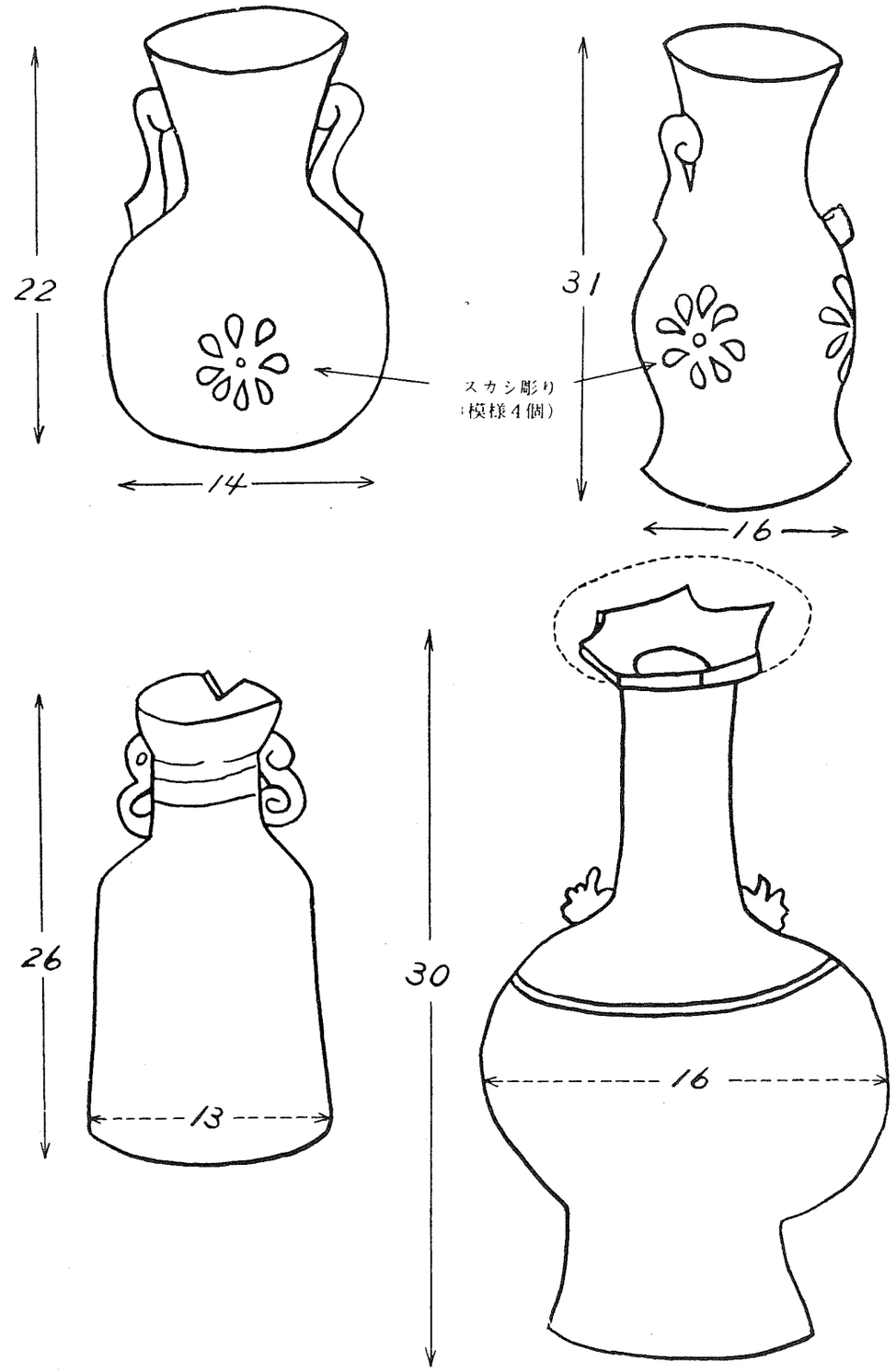
花びん（竹）

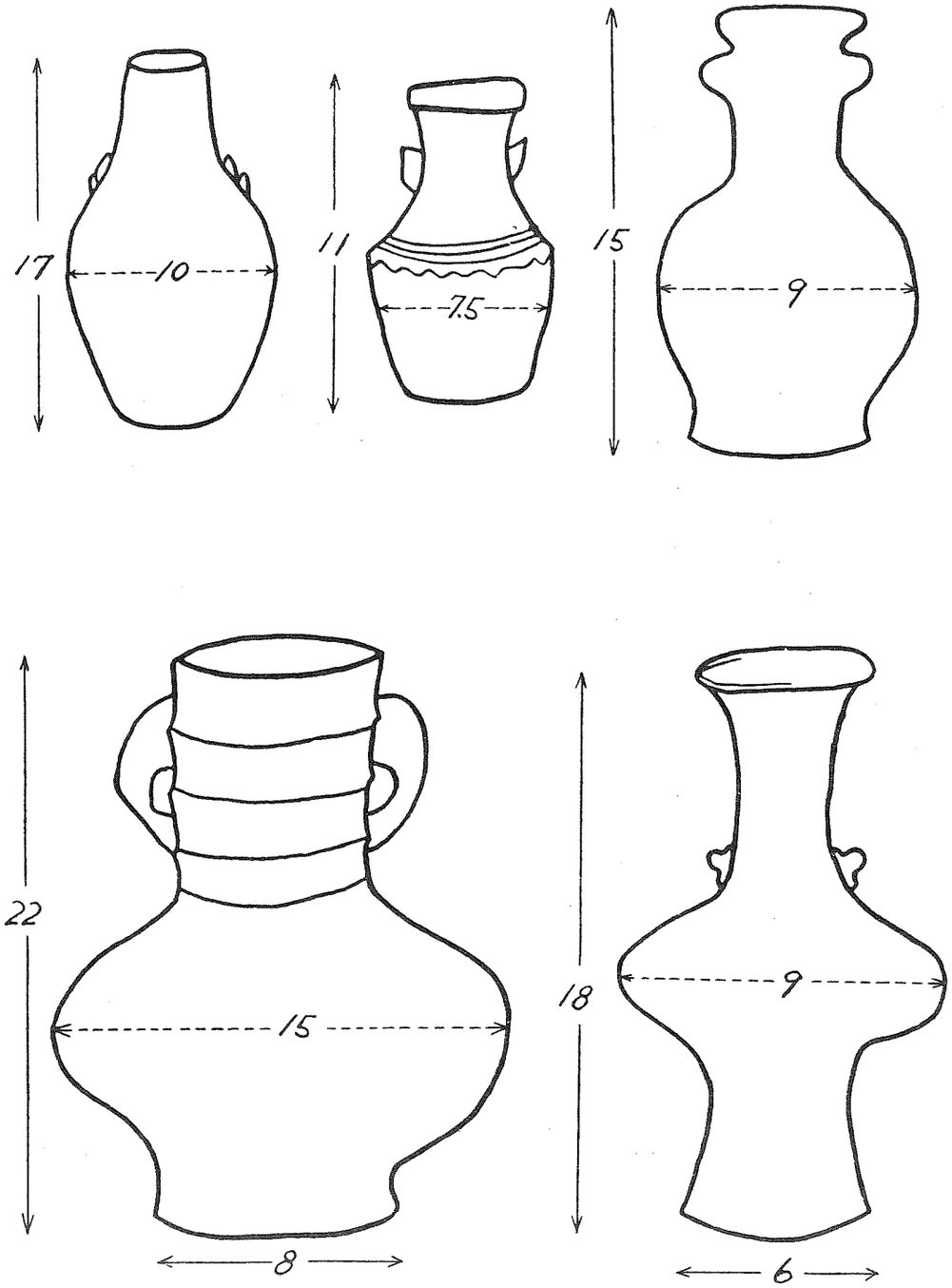
竹をモチーフにした花びんに，唐花模様をふしたもの。



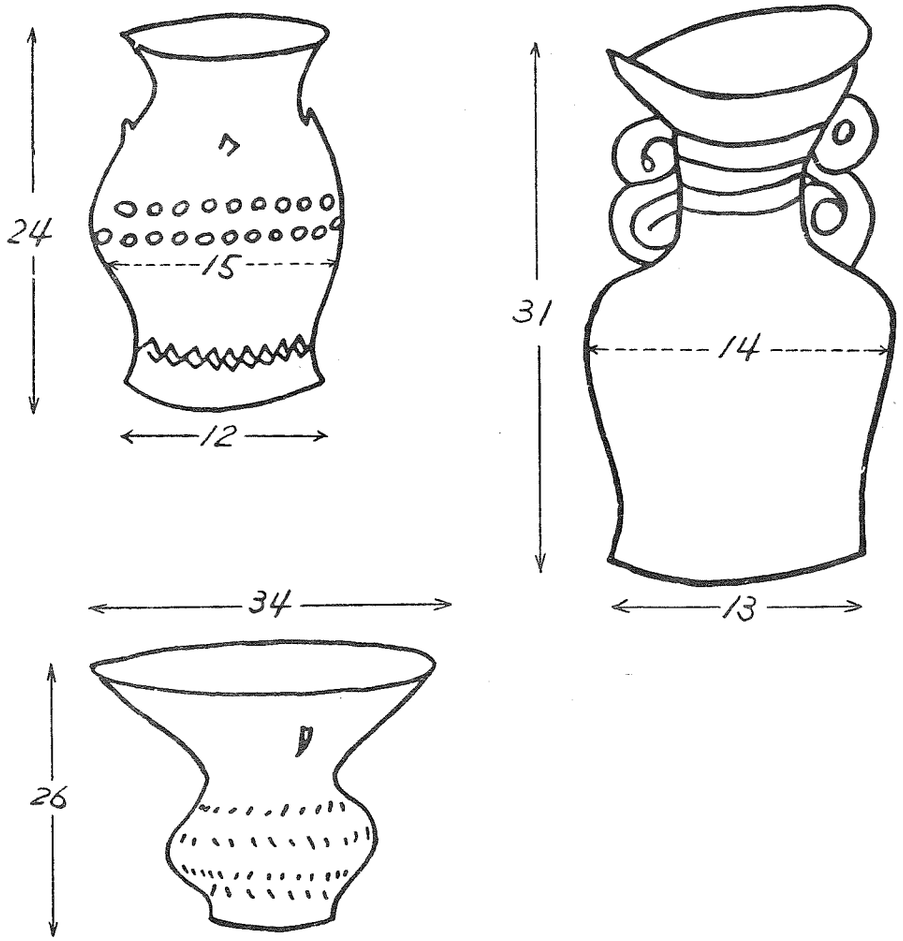


いろいろな花びん

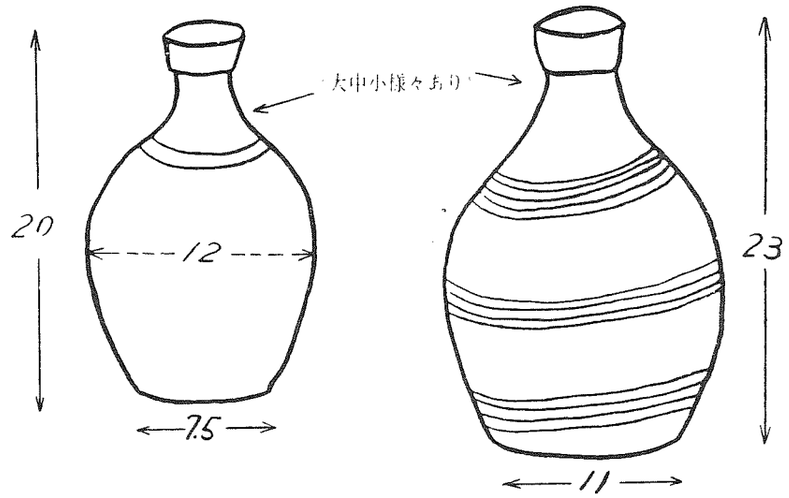


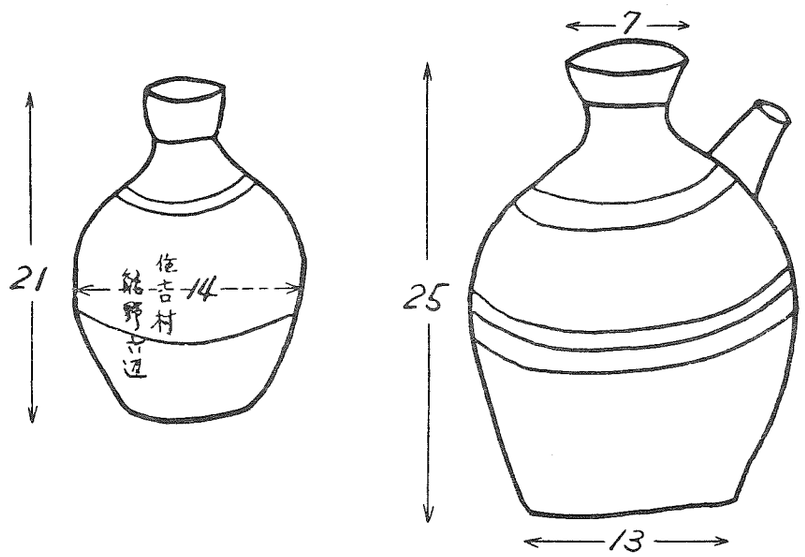


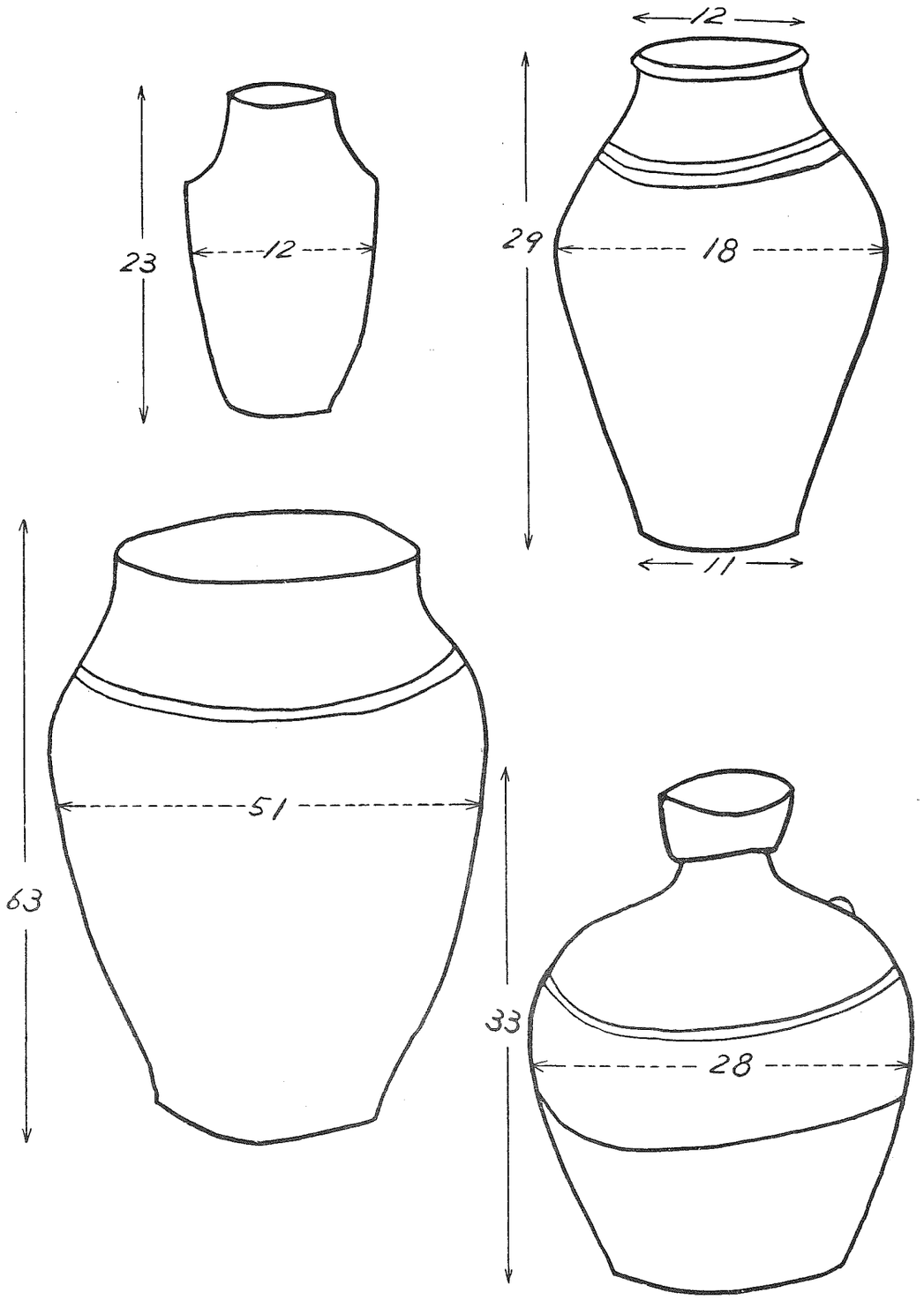
いろいろな花びん

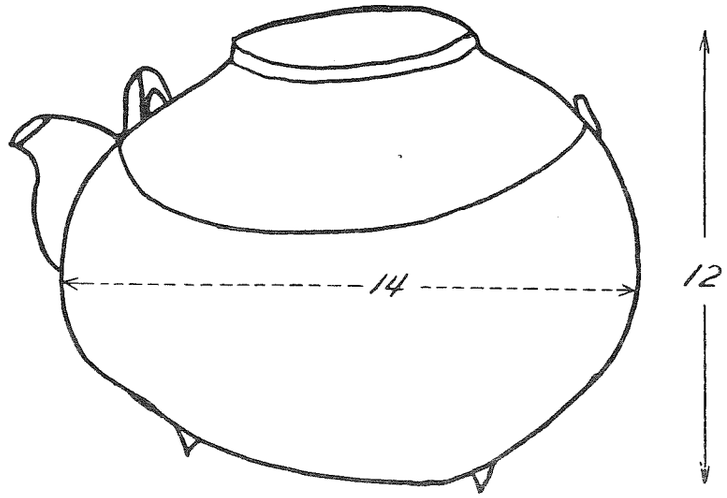


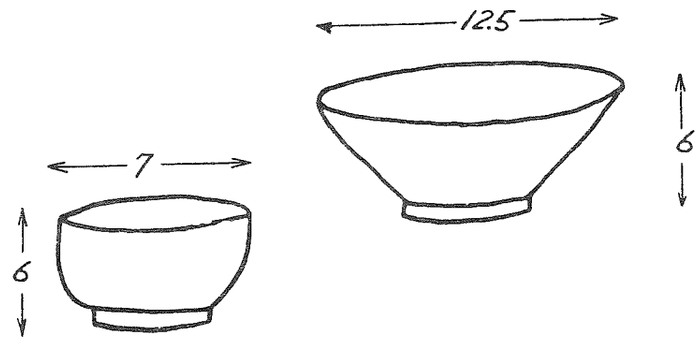
つ　ぼ

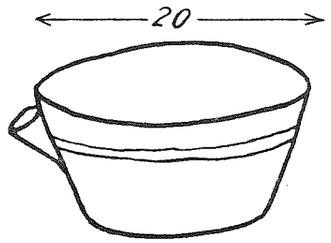

大中小様々あり
20
12
7.5
23
11

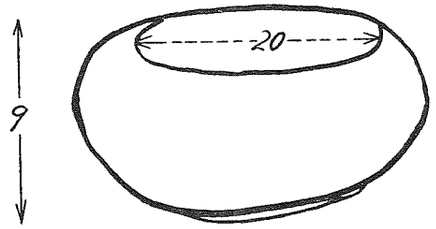

7
21
14
佐吉村
能野古道
25
13

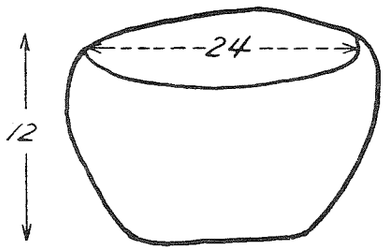

12
23
12
29
18
11
63
51
33
28

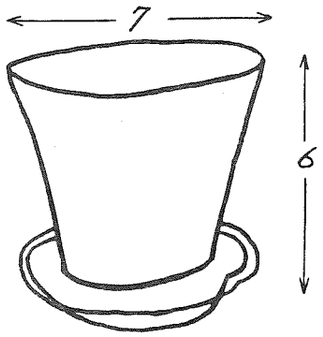

14
12

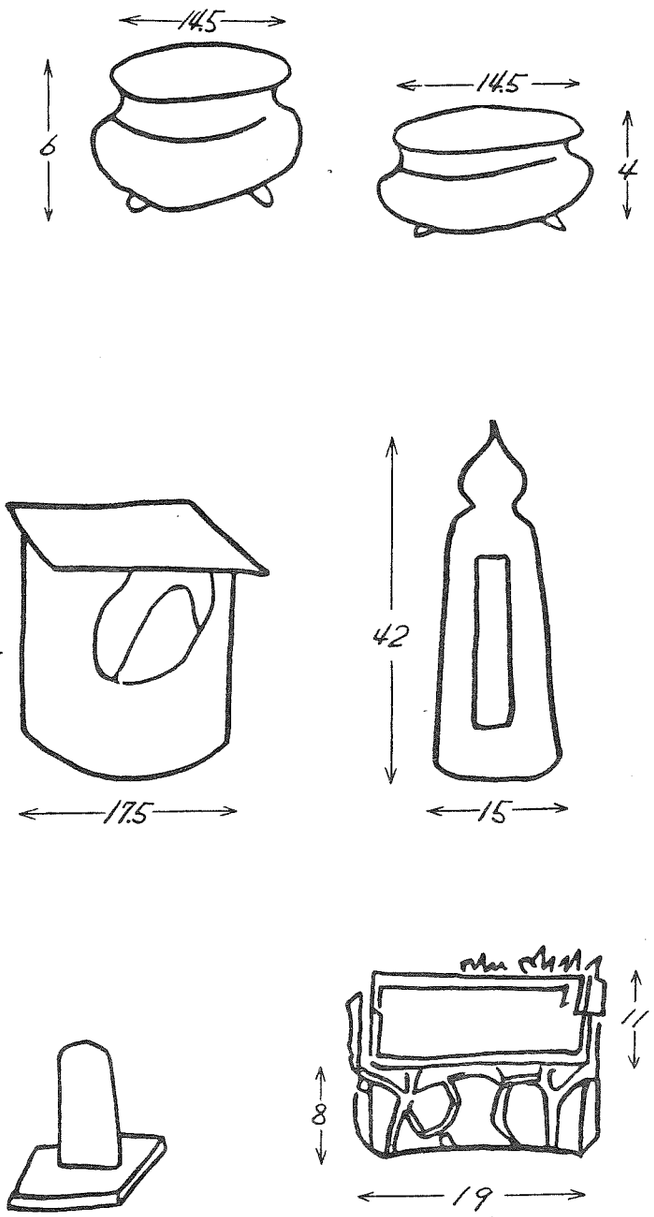

12.5
6
7
6

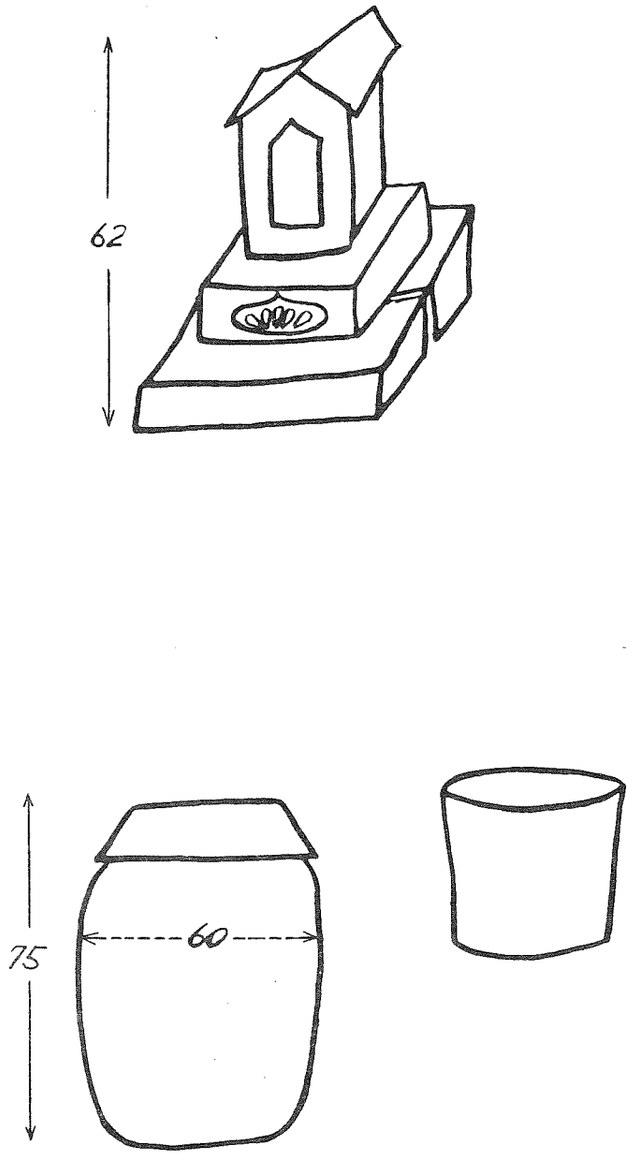

20
10

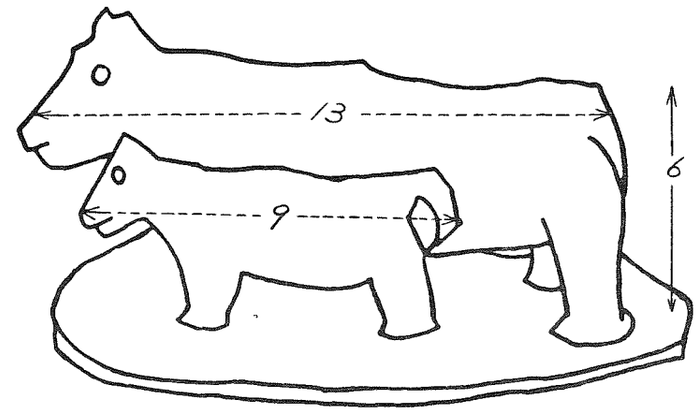
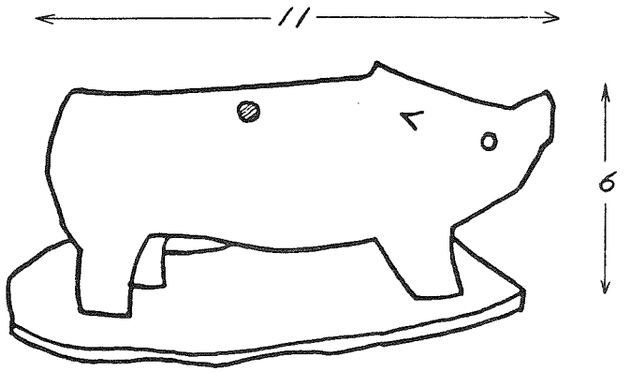
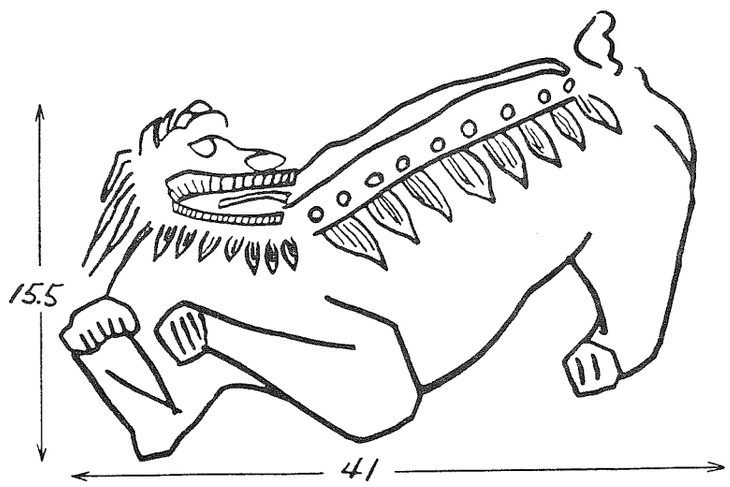
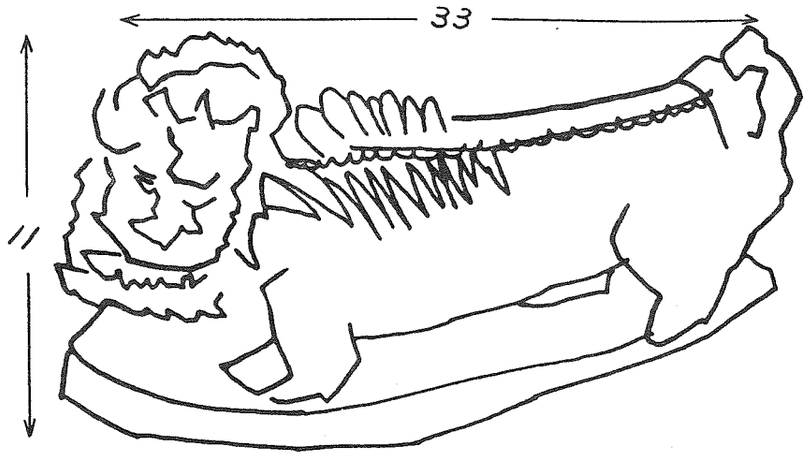
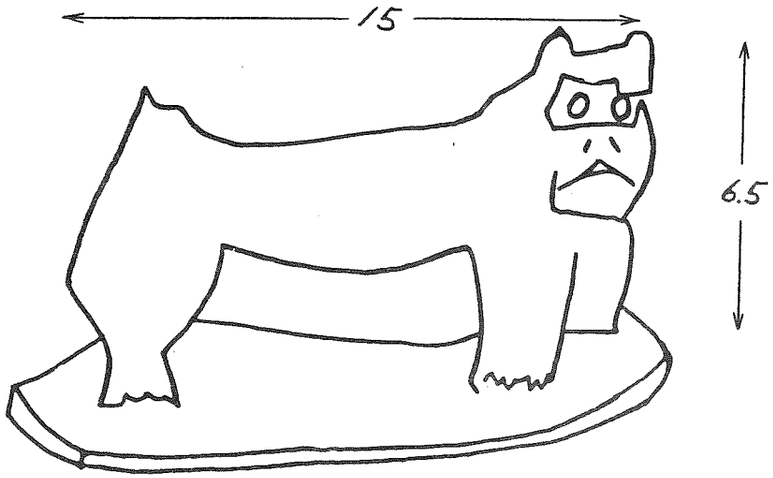

20
9


24
12


7
6


14.5
6
14.5
4
25
17.5
42
15
11
8
11
19


62
75
60



動　　物